
古代アメリカ学会会報

第 37 号



メキシコ、オアハカ州、ヤグール遺跡のパティオ

©成瀬晴正

目次

◆新会長あいさつ	1	◆シンポジウムのご案内	12
◆第 10 期役員紹介	3	◆第 19 回研究大会報告	
◆特集：研究者の道	3	◆事務局からのお知らせ	
◆書籍紹介	7	◆編集後記	
◆第 3 回西日本部会研究懇談会の報告	8		
◆第 4 回東日本部会研究懇談会の報告	9		
◆国際シンポジウムの報告	11		

2015 年 1 月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会長就任にあたって

関雄二（古代アメリカ学会第10期会長）

このたび、第10期の会長に就任いたしました関雄二です。これまで何度か代表幹事や役員を引き受けたことはございましたが、会長は初めてであり、いささか戸惑いがあることは隠せません。12月の総会でも申し上げましたが、今期の学会でルーティーン以外に何をすべきなのかは、役員の方々と相談し、学会員からの意見を参考にしながら決定し、実行していきたいと考えております。ここでは、本学会やアメリカ大陸の古代文明研究が現在置かれている我が国での環境について、私なりの雑感といたしますが、現状認識を披露しておくことで会長就任の挨拶に代えたいと思います。



アメリカ大陸ばかりでなく、世界の古代文明に係わる研究は、現在、若干の追い風と厳しい逆風という相矛盾する状況に置かれています。追い風といたしますのは、学校教育における位置づけです。1970年代から歴史学の分野で始まるグローバル・ヒストリー研究は、それまでの国別の歴史研究という狭い枠組みを否定する大きな流れを作り出しました。それでも、その流れの初期にあっては、西欧史中心主義から脱することはなく、周縁に位置する地域の歴史は、西欧史の説明道具でしかない時代がしばらく続きました。しかし、今日のグローバル・ヒストリー研究は、その限界を乗り越え、周縁とされてきた地域の歴史から他地域を見直すという動きに変わりつつあります。この流れは、歴史学のみならず、これまで周縁として絡め取られ、抑圧の対象となってきた先住民の運動と彼ら／彼女らの国際的発言力の高まりとも関係があると思われます。いずれにせよ西欧中心の歴史観からの脱却が求められる時代になったともいえるでしょう。

具体的には、世界史未履修問題に端を発する高校における歴史教科書のあり方において、我が国の日本学術会議は、このグローバル・ヒストリーを強調する教科書の策定と採用を提言しましたし、確かにその中では近代、それもアジアの中での日本が強調

されてはいますが、非西欧の歴史としての古代文明にも言及されています。西欧史を相対化し、人類史を俯瞰する重要な教育的役割を古代文明が担うべきというメッセージだと受け取ることができます。

一方で、大変厳しい逆風も感じています。学術会議の方向性と真っ向から対立するようなナショナリスティックな発言を繰り返す政治家は多く、世界史に代わる日本史の必修が中央教育審議会で議論の対象となることは間違いありません。ここでの結論が次期の学習指導要領の改訂に反映されることを思えば、学術会議の提言を考慮しない限り、古代文明を扱ってきた世界史教育が先細りとなってしまいます。

さらに古代文明研究に対する一般社会の眼差しにも大変厳しいものがあります。巷間を騒がせた旧石器捏造事件以来、考古学、あるいはその方法に対する懐疑主義は増すばかりで、検証を重ねる当該学会の行動や説明はなお不十分であるという批判は絶えません。この状況を反映してか、考古学を志望する学生の減少に歯止めがかからないとよく耳にします。もちろん、アメリカ大陸の古代文明を研究する場が大学の考古学教室に限定されるわけではありませんが、そこから巣立った研究者が数多く存在することも否定できません。次世代の研究者の育成という観点からは決して見過ごすことができない状況だと思います。

さて、こうした若干の追い風と厳しい逆風の中で、本学会は何をすべきなのでしょう。まだ漠然としています。これについて4つの課題をあげておこうと思います。もちろんこの中には、すでに大貫、加藤両会長時代にすでに手をつけられてきたものも含まれます。

第一は、学会における研究水準の維持とさらなる研究の強化です。学会員相互の切磋琢磨なくしては、捏造のような愚かな行為を排除することはできません。このためにも学会は会員の研究活動を積極的にサポートすべきと考えます。幸いにも、この点については加藤会長時代に東西の研究懇談会が発足し、研究大会に限られ、しかも短時間であった研究成果の場と時間が拡大されました。また、研究大会における日程の拡大も、より多くの会員の参加を促す意味で優れた決断だと思います。今後は、この路

線の継承と発展を図っていくべきでしょう。

第二点は、会誌の質の維持です。前期の役員の尽力もあり、近年の会誌の充実ぶりには目を見張るものがあり、この流れを絶やしてはならないと考えます。理科系の学会では、学会誌に掲載された論文の引用数によって雑誌が評価され、国からの助成金に連動してだけでなく、掲載された論文のレベルが定まってしまう。すなわち引用の少ない学会誌に掲載された論文は、引用の多い学会誌の論文より低く評価されるのです。だからこそ、学会は会誌の質の向上に必死になって取り組まざるをえません。人文系の学会が置かれた状況とは異なりますが、会誌の質を保つ努力の姿には見倣うべきものがあります。

第三点は国際化です。現在、あらゆる分野の学会で問われている点でもあります。ただし、この言葉が意味する範囲は広く、またその実行も容易ではありません。学会誌の欧文化、それにとまなう編集体制（エディトリアル・ボード）の見直しから Web サイトの欧文化、さらには他国の学会との交流や外国人研究者の招へいなど、あげればきりがありません。これらに手をつけるためには、おそらく 1000 人を超える学会員、そしてその活動を支える予算と役員体制が必要となるでしょう。残念ながら、本学会が、これらのすべてを実現するほどの体力を備えていないことは認めざるをえません。しかし、これまでも学会誌に欧文の論文を掲載することは認められてきましたし、研究大会のプログラムに外国人研究者の記念講演を組み込んだこともありました。こうした努力を少しずつ続け、身の丈に合った国際化を進めることは重要だと考えます。

第四点は社会還元、あるいは教育普及といった分野です。学会というよりもアメリカ大陸の古代文明を研究する学界自体を維持していくためには、一般社会の理解と支援が必要です。この点も現在では、会員個人々の努力に依存しているところが大きいと考えられます。今後は、外部資金の導入を含め、学会が率先して公開シンポジウムを開催し、また会員が企画するさまざまな集会を支援していくことが必要でしょう。

そして忘れてならないのが、次世代の研究者の養成です。我が国でも国や学会レベルで、若手研究者に対する支援の仕組みが近年整備されつつあることはご存じのことと思われまふ。こうした支援を本

学会でも考えていくことはもちろんですが、私がここで強調したいのは、そうした若手研究者になる前の若者や年少者が属する中等教育や初等教育の現場に対する働きかけの必要性です。

確かに大貫会長、加藤会長時代には、中等教育、とくに高校の世界史教科書における記述の誤りを正す検討が行われ、それに関連するシンポジウムも外部資金を得て行ってきました。これは一つの立派な成果だと思います。しかし、他の分野の学会では、もう一歩踏み込んだ対応をしているところが多いように思われます。すなわち、実際に教科書を利用する初等、中等教育の教員に対する働きかけです。教科書で書かれている用語や概念の解題や、その分野を通じて学ぶべき目標など、教科書の利用方法についてさまざまな助言を行っているのです。具体的には、副読本の制作、初等・中等教育の教員との定期的なシンポジウム、そしてそれらの成果の Web での発信などです。単発ではなく、継続的にこうした活動を行っていくことこそ、古代文明に関する関心を教育現場で生みだし、ひいてはその教育を受けた若者たちに、研究を志す契機を与えることにつながるものと考えます。その意味で、教育普及の問題はきわめて重要な課題であると思ひますし、現在の学会の体制でも取り組むことが可能な分野でもあります。

今年学会が発足してから 20 年の節目にあたる年です。20 年ともなれば、若い学会という言葉に逃げてはいられません。成熟した学会として、会員の研究の向上を支援するとともに、一般社会に認知されるように努力を重ねていきたいと考えています。そのためにも役員と会員が手を携えて研究環境の改善を図っていきましょう。どうぞよろしくご協力ください。

第10期 (2015. 1. 1~2016. 12. 31) の新役員紹介

先述のように、選挙結果と関雄二新会長の任命により、第10期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会長 関 雄二 (国立民族学博物館)
代表幹事 坂井 正人 (山形大学)
監査委員 青山 和夫 (茨城大学)
伊藤 伸幸 (名古屋大学)
事務幹事 松本 雄一 (山形大学)

運営委員

会計 土井 正樹 (日本学術振興会特別研究員PD)
編集 大平 秀一 (東海大学)
井関 睦美 (明治大学)
村野 正景 (京都文化博物館)
広報 鶴見 英成 (東京大学総合研究博物館)
研究 渡部 森哉 (南山大学)
会報 福原 弘識 (埼玉大学・文京学院大学)
中川 渚 (総合研究大学院大学)

特集：研究者の道

今回の特集は、今後の活躍が一層期待される、博士号を取られたばかり、もしくは今まさに博士論文に取り組んでおられる会員の方に、これまでの研究内容から今後の展望まで綴っていただきました。西野浩二会員は新大陸での応用を見据えた京都での植物考古学、ダニエル・サウセド会員はペルーでの遺産活用についての課題とテーマは異なりますが、今後益々研究に邁進していくお二人の研究者としての道、そして研究への意欲を感じていただければと思います。

●植物と考古学の間から見える世界

西野浩二 (名古屋大学大学院情報科学研究科博士後期課程2年)

はじめに

本稿は現在、筆者が研究テーマとしている平城京と平安京における植物利用に関する研究の知見と経験をまとめたものである。研究対象地域は本会対象地域のアメリカ大陸から遠く離れているが、植物考古学の研究手法を身につけたうえで、いずれ将来的には新大陸考古学の研究に応用できるようにと、日々精進している。

これまで筆者は都市における植物と人の関わり、とりわけ植物の栽培と消費、祭祀を対象として研究を続けてきた。研究テーマは、植物が庶民の生活においてどのような価値を有し、どのように栽培・加工・消費されていたのかを、文字資料や絵文書資料などからだけでなく、遺物の出土状況などの考古学的根拠や民俗学的知見を通して明らかにしていこうとするものである。そのうえで、古代社会における栽培植物の流通と環境の変化を明らかにし、都市の環境変化についても研究の視座に入れている。

種子研究との出会い

筆者と植物考古学の出会いは2008年の秋にさかのぼる。当時、天理大学の学生だった筆者は奈良教

育大学で行われた新薬師寺旧境内の調査でウォータセパレーションをしている際にモモ核やセンダンの種子を見たことに始まる。その半年前に天理大学で受講していた、金原正明教授の講義で興味を持っていたが、本格的に植物考古学というものに目覚めたのは、現場で種子を手に触れたことからであった。

その発掘後、筆者は天理大学を卒業するまで金原教授の研究室に足しげく通い、教を請い、雑用も進んで行った。最初は、「使えんアホが来たと思われているのだろうか」と感じていた。ここ最近、多忙のためにお伺い出来ない状態が続いている。しかし、「留学生」、「アラビア人」など、あだ名で呼ばれるまでの関係になってしまっている。これは、一つの勲章であろう。いや、筆者の人間形成に大きな影響を与えた。

平安京右京六条三坊の種子

2011年の秋、京都橘大学大学院修士課程に所属していた筆者は、平安京のモモを調査している際、とある遺跡から出土した種子と出会った。それは故・堀内明博氏(京都府立大学特任教授)が調査を行った平安京右京六条三坊の流路や井戸、土坑から出土した種子だった。この種子は、生前の堀内氏と食事をしているときに、酒に酔った氏が「お前、モモを卒論でやっているなら、整理してみろ」と珍し

く筆者を名前で呼ばず、我が子にチャンスを与える父親のような感じで言われたことから、調査するに至った。そして、この膨大な数量の種子を調査したときに「植物が持つ性質を知ること、当時の人々がどのようにして植物と関わっていたか、当時の栽培環境を紐解くことが出来ないだろうか」と考えるようになった。それ以降、種子への見方がガラリと変わった。それまでは、モモの種子だけを見てきた。しかし、モモ以外の種子を本格的に見ることが必要であることに気付かされた。

以降、ずっと植物考古学の研究に没頭してきたと言いたいところだが、ありがたいことに植物考古学以外の仕事や別のテーマで書いていた修士論文に追われることとなり、名古屋大学大学院博士後期課程に進学後、ようやく種子の研究・調査を再開した。

種子調査・研究の実情

植物遺体を対象とする植物考古学の研究には複数の研究手法があるが、遺跡から出土する植物遺体の整理に関して、筆者は3段階のプロセスが必要であると考えた。第1段階としては、遺構の各地区からどのような種類の植物遺体が出土しているかの整理。第2段階は、その個体の出土数のカウント。第3段階は植物遺体の大きさ、個数の変化を統計的に処理することである。この作業によって種の同定と環境の変化を読み解くことができよう。しかし、植物が生活においてどのような価値を有し、どのように加工・利用されていたかについては文献資料や考古学資料からはなかなか見えてこないものである。

調査研究のための標本採集

研究の礎となる地道な整理作業と同時並行で筆者が取り組んでいるのは、現生標本採集とデータ採取である。この現生標本採集は私の思い付きではなく、名古屋大学大学院入学前の浪人時代にご指導いただいた植物考古学の師である金原正明教授のご指導であった。現生標本を集めるということは、実際にその植物がどのような生態で、どのような環境を好むのかということを経験的に直接自分の目で見て、感じる、最高の機会である。具体的に述べるのは難しいが、同じ種類の植物でも場所によって、種子の大きさや木の生え方、葉の茂り方などに微妙な差異があるように感じる。当然、古代の人々が実際に生活をした風景をそのまま感じる事が出来るわけでは

ないが、少なくとも利用された植物がどのような環境下で生育し、現代においてどのように利用されているかということフィールドワークすることは、おそらく種子の分析においても無駄ではなかろう。

筆者が現生標本を得るために心がけていることは、京都市近辺に大きなアンテナを張り巡らせることである。例えば、「クワの木が八幡の流れ橋の付近にあるよ」と聞けば、カメラ、フィルムケース、殺虫剤を入れたポーチ片手に採取に向かう。「オニグルミなら、あそこの寺の裏にあるよ」と聞けばすぐに採取。また、とある神社の社務所の前にある明治になって間もない頃の記録にも記されたソテツの雌株に登って種を取り、「隣の雄花は咲いてないけど、遠いところで雄花が咲いたら、今年も実りますよ」と晩夏に神主や神社の職員の方へ話した。最近見に行くとソテツの雌花に果実が本当に実っていた。「これでお守りが作れる」と神社も安心していることであろう。はたまた、ウリ科の種子を調べるために冬瓜を丸々1つ購入して、美味しく頂いた後に種の総数をひとつひとつ数えることもした。ただし種子のカウントは、あまりの種の多さと暑さにより1回で頓挫してしまった。

とにかく、情報を得たら現場へ直行することをひたすら繰り返し、ある日は京都駅の南側から鞍馬寺の付近まで約30キロメートル近くの距離と急勾配の坂を酷暑の中、電車も使わず自転車で登るということもした。

おそらく、現生標本作りは考古学という土器編年を作るための類例収集に値することであろうか。いや、ただの植物の魅力に憑かれた者がやることであろう。

民俗学的な情報収集

標本収集は大事な工程である。しかし、先にも述べたとおり、それでもヒントは得られず、色々な方から意見や情報を得ることも筆者の研究では重要なものである。例えば、神社の祝詞にはあまり植物の記載がないが、神社の植生は祭祀でのお供えと関連するものだという事も伺った。明治天皇の陵墓が伏見にあるが、江戸時代初期の辺り一帯はモモの名所であったという記述が、今で言うガイドブックに書かれていて、それを記したのは貝原益軒という福岡藩黒田家に仕えていた家臣であることも耳にした。行きつけのカフェの客からは、京都の人々が植物を愛し、生活にうまく取り込んできたのだとも

聞いた。

こうした何気ない雑談で得た情報こそが、いつか自分の研究へ意外なヒントを与えてくれたりもする。どこで何が繋がっているか、わからないものである。

むすび

植物考古学において、種類の同定だけではなく、その植物がなぜ利用されてきたのかを明らかにするためには、植物民俗学の観点やその土地での農業活動などから見てみるなど、考古学以外のソースからのアクセスこそが解明の鍵になるであろう。おそらく我々が思う以上に、当時の人々と植物との関わりは密接であったろう。

天理大学に在籍していた当時、中東や中国、ローマなど諸文明の植物考古学を学ぶ機会を得たが、筆者から見て植物と人の関わりを明らかに出来ると感じたのは、ラテンアメリカであった。日本はイネ、ラテンアメリカはトウモロコシと品種は違えども、穀物を食べ、外部との接触がほとんどないなど、共通点は多い。また、ラテンアメリカでは、コンキスタドールや司祭によるリアルな記録が残っている。記紀神話におけるイザナキノミコトが黄泉の国で鬼や雷を追い払うためにモモの実を投げたというような神話からの非現実的な解釈ではなく、ラテンアメリカの文字記録には現実的な人と植物との関わりが描かれており、さらには遺物の紋様や形象土器などにも人と植物との関係性が読み解けるところに筆者は魅力を感じてこの学会に入会した。

今後も京都における遺跡出土の種子研究の傍ら、新大陸の植物考古学にも目を向け、人と植物の関係を追い求める研究を続けていきたい。

●「私のワカ」パブリック考古学から見た現代ペルーにおける考古遺産の活用

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ
(国立民族学博物館 外来研究員)

2014年6月に筆者は『「私のワカ」パブリック考古学から見た現代ペルーにおける考古遺産の活用』の博士論文を発表した。筆者は総合研究大学院大学比較文化学専攻に在学中パブリック考古学分野の研究を進めてきた。これは、主にイギリスや米国など欧米において早くから発達した研究分野であり、考古学に関わる情報を一般市民に伝え、教育するだ

けでなく、市民とともにその情報や遺跡、遺物の活用を考える実践的な側面を備えたものである(Matsuda and Okumura 2011)。その意味で、文化遺産の開発や社会的活用を研究する分野と言い換えてもよく、文化遺産に関わるあらゆる活動が調査対象となりうる。

筆者はペルー北海岸ランバイエケ州ポマ自然保護地区に存在する巨大な遺跡に関わる考古学者とコミュニティの調査活動や保存運動、遺跡周辺で暮らす農民の生業活動などを調査し、とくにそれぞれのアクターが抱える歴史観の相違とそこから生まれる社会的コンフリクトに注目しつつ、それを乗り越える共生のモデル構築を目指した。

ペルー北部海岸の遺跡の保存に関しては、様々な問題が横たわっている。スペイン人による植民地期から現在に至るまで、この地域では金銀製品や土器を中心とした盗掘が一般的に行われてきた。しかしながら近年では、都市や農地の拡大が問題をより複雑にしている。土地問題や土地利用に関するコントロールが、政府機関や地方自治体、地主を含む様々なアクター間の対立を引き起こしており、このようなコンフリクトにさらされて遺跡は破壊されている。



遺跡の不法占拠反対の看板 (バタン・グランデ村)

この問題を前にして、企業や考古学者の支援を受けたペルー政府は、地元農村における生活の質を改善し、住民が遺跡を「考古遺産」として保護することに関心を抱くよう、観光事業を推進している。この目的を達成するために、博物館展示やパンフレットの配布、講演会、NGOの開発プロジェクト、学校教育プログラムを含む様々な方法が用いられている。

しかし、これら政府の主導にもかかわらず、考古

学遺跡や遺物は未だ破壊され続けている。考古学者たちはこの原因を、住民が価値を理解していないことや、教育不足にあると捉えてきた。

筆者の博士論文では、地元住民が遺跡の価値づけや考古遺産の定義を自ら行っていないことに遺跡破壊の原因があるという仮説を提示した。現在、ペルーにおける「考古遺産」の定義は、考古学者の視点（科学的・客観的な歴史観）しか含んでおらず、一般市民の視点（主観的な歴史観）が置き去りにされている（主観的-客観的歴史観の概念については関 2007 を参照）。そのため、地元住民にとっては、外部からの概念が押し付けられている状況となっており、考古学者や政府側の意図とは異なる方法で利用されるのである。

この仮説を検証するために、ポマ周辺の村で通算1年3ヶ月にわたる調査を行った。視覚的表現、コミュニケーションメディアに見られる情報の分析と集成、参与観察、「ステークホルダー（利害関係者）」の同定、ランダムなインタビューなどの調査方法を通して、この地域における遺跡の様々な利用方法を特定することができた。いくつかの利用方法は、政府政策と一致、もしくは遺跡保護に影響がない（観光、ローカルアイデンティティの確立、地元シンボルとしての活用など）が、その他の利用方法は政府政策に反しており、遺跡の保全に直接影響があるようなもの（住宅建設、家畜囲いの設置、シャーマンによる儀礼利用、装飾品としての遺物収集など）であった。これらの観察を通して、考古遺産の価値付けや利用方法には政府や考古学者の意図を越えた多様な形があること、ひとつの利用方法を押し付けようとするとアクターの間でコンフリクトが生じることが明らかになった。



シカン文化の埋葬仮面装飾（フェレニャフェ市公園）

本調査は、シカン国立博物館による一般市民向け教育プログラムの検討という側面も持っていた。博物館によって行われた様々な活動の分析を通して明らかになったのは、考古学者と一般市民の間にほとんど相互交流の場がなく、存在するわずかな交流の場は双方向のものではなく考古学者からの一方的発信であり、一般市民にとっては受動的なものでしかないということである。そのような背景における主要な相互交流の場は、博物館所属の考古学者によって開催される地元学校教師向けの教育プログラムだった。著者はこの相互交流の場をより詳しく観察し、特に教師へ向けた印刷物が教師の理解をより深めることで、本プログラムが改善することを目指し、考古学者と共同で働いた。本調査を通して、考古遺産についての教育問題で教師が抱える問題だけでなく、考古学者側の問題についても検討することができた。また本教育プログラムの場が、考古遺産について教師が受動的に学ぶだけでなく、自らの考えを考古学者たちに向けて提起する場となっている様子を観察することができた。



庭の装飾品として遺物が置かれる（ラ・サランダ村）

結論として、地元住民による遺産保護への参加を期待するのであれば、遺産の概念を地元住民による現実の観念や利用方法と統合させる必要がある。そのため一般の人々が、個人、地元、地域、国家といった様々なレベルで得られるような異なる概念を拾い上げる必要がある。これを達成するひとつの場は学校教育プログラムである。しかし考古学者は、考古遺産の定義が考古学者の考えているものだけではなく、できるかぎり多くの概念を統合したものでなければならないと認識する必要がある。以上のことから、今後は、現在よりも広い考古遺産の定義

を提起することを目的として、ペルーにおける異なる文脈での様々な考古遺産の概念を研究していこうと考えている。

【引用文献】

Matsuda, Akira and Katsuyuki Okamura
2011 Introduction: New Perspectives in Global

Public Archaeology. In *New Perspectives in Global Public Archaeology*, edited by K. Okamura and A. Matsuda, pp. 1-18. Springer, New York.

関雄二

2007 「盗掘者の論理と発掘者の論理」『季刊民族学』121: 24-29.

書籍紹介

『マヤ・アンデス・琉球 環境考古学で読み解く「敗者の文明」』（朝日選書）と『文明の盛衰と環境変動 マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』（岩波書店）

青山和夫（茨城大学人文学部教授）

文部科学省の大型科研費プロジェクト「環太平洋の環境文明史」（平成 21～25 年度、領域代表：青山和夫、直接経費：5 億 2470 万円）は、科研費の種目のうち大型の研究助成が申請可能な新学術領域研究において、平成 21 年度に人文社会系で唯一採択された。私たちは、メソアメリカ文明、アンデス文明、琉球列島をはじめとする太平洋の島嶼社会という、環太平洋の諸文明の盛衰と環境変動の相互関係を解明し、既存の学問分野の枠に収まらない新興・融合領域である環境文明史の創成を目指した。考古学、歴史学、地理学、文化人類学、認知心理学など文系分野と古環境科学、自然科学的年代学、情報科学などの理系分野の多様な研究者 30 名以上を主なメンバーとして研究領域を融合させる共同研究である。プロジェクトに携わった研究者は、国内外の研究協力者を合わせると実に 100 名を超える。

プロジェクトは、年縞環境史班（代表：米延仁志・鳴門教育大学・年輪年代学）、メソアメリカ文明史班（代表：青山和夫・茨城大学・マヤ考古学）、アンデス文明史班（代表：坂井正人・山形大学・アンデス考古学）、琉球文明史班（代表：高宮広土・札幌大学・琉球列島の先史人類学）の4つの研究班で構成された。私たちは、アメリカの科学誌 *Science* 掲載の2本の論文を含め、日本語、英語やスペイン語の370本を超える論文・図書を意欲的に刊行し、27カ国の学会で最新の成果を500本以上発表した。共同研究を推進した結果、湖沼堆積物を用いて復元した精度の高い環境史と編年を軸として、メソアメリカ、アンデス、琉球列島といった各地域における文明の実態を通時比較研究し、環境文明史という、

文系と理系の領域を融合する新たな学問領域を確立する土台を築きあげることができた。

「環太平洋の環境文明史」のような大型科研費プロジェクトの多様な成果を一冊の本で紹介するのは難しい。環境文明史の共同研究は、短期間で早急に成果が得られる分野ではなく、考古学の発掘調査や環境史のボーリング調査などのハードな野外調査を実施した後に、室内分析やデータ解析に多くの時間と労力を要する。私たちは5年間にわたり共同研究をこつこつと続けたが、分析途中や未発表の成果が残されている。そこで、主要な成果をできるだけ多くの読者に迅速かつわかりやすく紹介するために、プロジェクトが終了した2014年3月から半年以内に朝日選書と岩波書店から計2冊の一般書を刊行することにした。

2014年8月に刊行された青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土『マヤ・アンデス・琉球—環境考古学で読み解く「敗者の文明」』（朝日選書）では、4名の研究代表者が、科研費プロジェクトの成果を簡単に紹介するだけでなく、環境史、マヤ文明、アンデス文明、先史・原史時代の琉球列島について一般の読者のために概説した。本書の構成は、序章 環太平洋の諸文明と環境（青山・米延・坂井・高宮）、第1章 環太平洋の環境史を調査する（米延）、第2章 マヤ文明の盛衰と環境利用（青山）、第3章 古代アンデス文明における環境変化とナスカ地上絵（坂井）、第4章 琉球列島の環境と先史・原史文化（高宮）、終章 環太平洋の環境文明史と「真の世界史」（青山・米延・坂井・高宮）、あとがき（青山・米延・坂井・高宮）、参考文献となっている。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土（編）『文明の盛衰と環境変動 マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』（岩波書店）では、4名の研究代表者が編著者を務め、計28名の執筆者が、「環太平洋の環境文明史」プロジェクトの最新の成果を各章やコラムでわかりやすく紹介した。しかし

本書は、決して専門的な論文集ではない。専門用語の使用をできる限り避け、現地調査のエピソードやその土地と文化に魅せられていく様なども織り込みながら、楽しい読み物を集めた一般書である。執筆者は、中堅・若手の研究者が大部分を占める。

はしがき(青山・米延・坂井・高宮)に続き、第I部 環太平洋の環境史を調べるは、湖の底から環境の変遷を探る(米延・山田和芳・五反田克也)、水月湖の土が語る五万年—世界標準となった年代の「ものさし」(中川毅)、コラムの樹木の年輪からみた近世の社会と環境変動(大山幹成・米延)と津波堆積物は語る—東日本大震災の教訓(原口強)から構成される。

第II部 メソアメリカ文明の盛衰と環境は、マヤ文明と環境変動(青山)、テオティワカン—「神々の都」の誕生と盛衰(嘉幡茂)、アステカー自然災害を乗り越えた王国(井関睦美)、先住民にとっての自然環境の歴史的記憶—スペイン征服を生き延びたナワ人の文書から(井上幸孝)、マヤ先住民女性の衣文化の謎を探る(本谷裕子)、コラムの中米地峡を行き交うモノと人々(長谷川悦夫)からなる。

第III部 アンデス文明の盛衰と環境は、地上絵と共に生きた人々—ペルー南海岸ナスカ台地周辺における社会変動(坂井)、ナスカ盆地周縁でカタツムリを探す—ペルー南海岸の古環境変化を求めて(阿子島功)、ナスカ砂漠に生きた人々と食性の変化(瀧上舞・米田穰)、コラムの直線の地上絵は何を語るのか(渡邊洋一・本多薫)とコブのないラクダが作った文明—リヤマ・アルパカと神殿社会(鶴沢和宏)から構成される。

第IV部 環太平洋の島嶼の環境と先史・原史文化は、奇跡の島々—先史時代の奄美・沖縄諸島(高宮)、

島における先史時代の墓(新里貴之)、サンゴ礁の貝を利用し続けた沖縄の人々(黒住耐二)、環太平洋北部の狩猟採集民—自然、歴史、変化(マーク・ハドソン)、コラムの「ウミアッチャー」の時代から「ハルサー」の時代へ(樋泉岳二)、沖縄貝塚時代人がみたサンゴ礁(菅浩伸)、ウォーラシア海域—人類最古の長距離航海とマグロ漁が行われた島々(小野林太郎)、首長なき社会のモニュメント:バンクス諸島祭祀遺跡の事例(野嶋洋子)及びイースター島民は最後の木を切り倒さなかった(印東道子)からなり、あとがき(青山・米延・坂井・高宮)が続く。

これまで干ばつなどの気候変化によって文明が衰退したという、センセーショナルだが、やや短絡的な仮説がマスメディアに注目されてきた。私たちの共同研究によって、「勝者」によって征服・植民地化され、歴史の表舞台から消されたメソアメリカ文明、アンデス文明、琉球列島の島嶼社会の盛衰と環境変動に関する実証的なデータを収集した結果、そうした仮説の問題点が浮き彫りになった。

メソアメリカ、アンデス、琉球の諸文明は、変動する自然環境にインパクトを受けて単純に「勃興」し「崩壊」したのではなく、自然環境と共生し、あるいは自然環境を破壊しながらも、2000年以上にわたって持続可能な社会を築いた。その意味で、メソアメリカ、アンデス、琉球は、決して敗者の文明ではなかった。これらの社会は、新たな選択肢を見出して社会のレジリエンス(回復力)を高め、戦争、自然災害や人口問題など、社会が被る可能性がある問題を連鎖させないようにした。現代社会にとって、極めて貴重な歴史的教訓がここにある。

第3回西日本部会研究懇談会の報告

第3回西日本部会研究懇談会

『メソアメリカ南東部ボーダーラインの考古学 - 現状と展望』

西日本部会の第3回研究懇談会は、秋も深まる10月25日(土)の午後、京都外国語大学の国際文化資料館にて開催された。会員であり今回の発表者でもある南博史京都外国語大学教授には会場を提供していただき、また同大学大学院生の植村まどか氏には懇親会会場探しに力を貸していただいた。この場を借りてお礼申し上げる。参加総数は17名で、うち

16名が会員、1名が非会員であった。発表者とコメントーター以外では、北陸や九州から参加して下さった会員もいた。懇親会にも多くの方が参加し活況を呈した。

若手の博士論文を扱った第2回とは異なり、今回はベテラン大学教員を中心とする継続的プロジェクトが組上に載せられた。我が国のメソアメリカ考古学の草分けである故大井邦明氏のプロジェクトを起点として、現地の政情にも影響を受けながらも継続し、近年活発になってきた南東部での調査研究の流れと成果、そして将来の展開を俯瞰する試みである。

①南博史・植村まどか「ニカラグア共和国マタガルパ県における考古学と博物館学を仲介者とした実践的地域研究プロジェクト・マティグアスの現状と課題」

南・植村両会員の発表は、京都外国語大学の調査団がニカラグアでの発掘調査を実現するに至った経緯に始まり、考古学・博物館学を介した多角的プロジェクトの概要が紹介された。例えばニカラグアNGO団体との連携による博物館設立計画、現地大学との協力関係による現地考古学者の育成、京都外国語大学の卒業生が経営する企業のメセナ活動を仲介する形での現地小学校の教育支援などである。今年初めて実施されたラスベガス遺跡発掘調査の進捗状況も報告された。コメンテーターの長谷川悦夫会員は、いわゆる「中間領域」における考古学研究の歴史と現状について、地域間関係などに触れながら補足説明した。他の会員からは、黒曜石の流通などについての質疑応答が複数あり、予定時刻をやや延長することになった。

②伊藤伸幸（名古屋大学）「エル・サルバドルの考古学」

伊藤会員の発表では、まず故大井邦明氏による京都外国語大学のプロジェクト立ち上げに始まり、そこから名古屋大学によるエル・サルバドルでの発掘に到る調査史とその成果が紹介された。中南米で考古学を続けていると、時には現地の政情によって調査地の選択などが左右されてしまうこともある。ペルーの故フジモリ元大統領が1992年に断行した自主クーデタが、めぐりめぐって名古屋大学調査団を

グアテマラからエル・サルバドルへと導いたエピソードは、私も一人のペルー考古学者・ラテンアメリカニスタとして興味深く傾聴した。また伊藤会員らによるチャルチュアパ遺跡発掘の成果として、先古典期中期から古典期後期に至る詳細な遺跡利用パターンの変遷や、先古典期後期のジャガー石彫の発見などが報告された。コメンテーターの村野正景会員は、ニカラグアなど近隣各国の研究状況を踏まえた上でのエル・サルバドルでの調査の意義や、この地における日本チームの考古学が貢献する人材育成や歴史教育などについてコメントした。その後、チャルチュアパ、カミナルフユなどの南東部諸センターとメキシコのテオティワカンとの関係について、複数の参加者によるコメントの応酬があった。テオティワカンの影響の過小評価が見直されてきた研究潮流や、中国考古学における中心と周縁との関係などとの比較も交えながら、活発に議論された。

（西日本部会幹事：芝田幸一郎）



第4回東日本部会研究懇談会の報告

第4回東日本部会研究懇談会 『権力のマテリアリティ』

年の瀬も迫った平成26年12月23日（火祝）、東京大学総合研究博物館にて第4回東日本部会研究懇談会を開催した。参加者は会員21名、非会員9名であった。今回の「権力のマテリアリティ」では、研究懇談会初の単独スピーカーとして村上達也会員（トゥレーン大学教養学部人類学科准教授）を迎えた。

東日本部会ではイベントのテーマのみならず、研究大会では実現不可能な企画運営上の実験を意図的に組み込んできた。第1回はインターネットを通

じた海外のコメンテーターとの交信、第2回は発表者各自に1時間を割り当てた博士論文中間発表、第3回は非会員を発表者・コメンテーターとして招待すること、そして第4回は在外会員の帰省を狙った年末開催であった。第19会総会においても議題になったが、12月第1土日という現行の研究大会・総会日程は、国外在住の会員が参加するには難しい時期となっている。しかし南北アメリカ在住の会員が多いことは本会の宿命であり、研究懇談会の場でなにか有効な取組はできないかと以前から考えていた。

村上氏は本会設立以来の古参ながら、アメリカ留学をきっかけとしてこの16年もの間、国内での口頭

発表の機会がなかった会員である。米国で学位を取得、さらに教職について中堅研究者であり、その研究成果を聴くことは広く会員の利益になると考えた。2014年の年末に研究発表および帰省のために日本に一時帰国することが早くから決まっていたため、第3回研究懇談会の準備と並行して調整させていただいていた。

発表内容は村上会員の博士論文をベースにしている。メキシコ中央高原テオティワカンの都市建設を国家形成の時期、都市変革の時期、国家衰退の時期と大きく3つの時期に分け、理化学的な定量分析を取り入れながらそれぞれの労働量と建築材（漆喰と切石）を分析する。そして権力関係は多次元的であるとの前提のもと、専制的権力だけではなく、インフラストラクチャー的権力に注目することで、権力関係がいかに変化していったかを考古学的に検証する、という研究であった。詳細については、抄録をホームページに掲載しているので参照されたい。

コメンテーターとして青山和夫会員（茨城大学教授）と関雄二会員（国立民族学博物館教授）をお招きした。またテオティワカン研究に関して村上会員を指導する立場にあった杉山三郎会員（愛知県立大学教授）は、予定が不透明とのことで正式にお引き受けいただくことはできなかったが、日程が調整できたとのことで当日は出席して下さった。かくして豪華なメンバーでディスカッションが繰り広げられた。

青山会員からはテオティワカンの起源、国家成立の考古学的根拠、マヤとの関係など、メソアメリカ考古学における重要な論点について多くの質問が寄せられた。関会員は、実践論と結びつけて国家レベルの権力関係を論じている点を高く評価し、さらにマテリアリティ研究を深めるよう提言した。杉山会員からはかつて都市内に多数配置されていた石彫群を含めた労働力計算の必要性など、テオティワカン研究の知見をふまえたコメントが提示された。

日本語での研究発表は久しぶりで、つかえるかもしれないとの登壇前の弁であったが、村上会員の語り口はきわめて明瞭で、1時間50分にも及ぶ講演で

あったがまるで苦もなく集中して聴くことができた。その後は懇親会、もとい忘年会でも話がはずんだ。

今回の企画は年末に意外と人が集まるということを示し、何人かから大成功との評もいただいた。幹事としての私の任期はこれで終了するが、12月23日は国民の祝日であり、定例化の可能性を見据えて設定したことを記しておく。東西交互に開催すればバランスが取れるだろう。実際、今回も西日本在住の会員が何人も参加している。

研究担当役員としてコメントすると、研究懇談会というイベントは会内に根付いたようだが、引き続き自由な発想で実験を繰り返すのが良いように思う。東西幹事は、本会会員の研究関心の内訳としての中米・南米のバランスを考慮した上で、東西のバランスに気を配ってきた。しかし、たとえば学生会員の比率は東よりも西で高まる傾向にある。東西それぞれの状況を反映させた企画立案も有効であろう。それと、毎回ある程度の非会員の参加が見られることは、古代アメリカ研究の普及という会の目的に即して評価できる点である。東日本では4回にわたり同じ会場を使用したため、実は本郷キャンパス周辺住民の中にリピーターが生まれている。シンポジウム開催などのほかに、このイベントを利用して広く活動を発信してもよいだろう。企画のますますの充実を願いつつ、一参加者として次の開催を待つこととしたい。

（研究担当役員・東日本部会幹事：鶴見英成）



国際シンポジウム

「Comparative Studies among the Formative Period Cultures in the Andes」(アンデス形成期文化の比較研究)

松本雄一（山形大学）

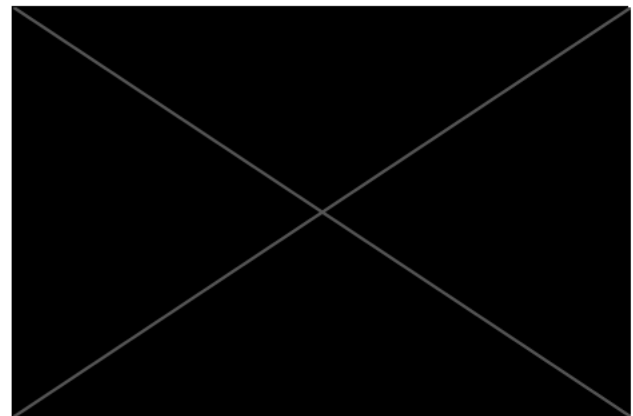
2014年11月29日（日）、国立民族学博物館 第6セミナー室において、「Comparative Studies among the Formative Period Cultures in the Andes」(アンデス形成期文化の比較研究)が開催された。本シンポジウムの主催は、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)、協力は古代アメリカ学会であった。

ペルー中央高地に位置するチャビン・デ・ワントルは、アンデス文明の形成過程において鍵となる遺跡として半世紀以上にも渡って議論の対象となっている。この遺跡において、1994年以来長期にわたる調査を実施しているのが、米国スタンフォード大学のジョン・リック准教授率いるチャビン・プロジェクトであり、年代測定や測量において最新の技術を用いたその調査は国際的な注目を集めている。今回のシンポジウムにおいては、同プロジェクトにおいて動植物の分析を行っている研究者が中心となって参加し、近年同時代の遺跡を発掘している日本人研究者が持つデータとの比較が試みられた。重要な遺跡の最新の分析結果を聞くことができる貴重な機会であり、使用言語が英語とスペイン語であったにもかかわらず参加者は21名と盛況であった。

発表者は、発表順に瀧上舞（山形大学）と米田穰（東京大学）、マシュー・サイヤー（南ダコタ大学）、鶴澤和宏（東亜大学）、シルバナ・ローゼンフェルド（南ダコタ大学）、長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）、ジョン・リックとロサ・メンドーサ（スタンフォード大学）であり、関雄二（国立民族学博物館）が総合司会を、鶴見英成（東京大学）と松本雄一（山形大学）がコメンテーターを担当した。

最初に瀧上舞と米田穰が、パコパンパ遺跡出土資料を用いた同位体分析の成果を提示し、形成期社会における食性変化とその社会的差異の萌芽との関わりを論じた。次に、マシュー・サイヤーが、チャビン・デ・ワントルの神殿の外側に位置する、ラ・バングダ地区から出土した大型植物遺存体とプラント・

オパール分析の成果を示し、そのデータが神殿外での儀礼と日常生活を明らかにする可能性を論じた。鶴澤和宏は、パコパンパとクントウル・ワシの動物骨の分析成果に基づいて、アンデス北高地におけるラクダ科動物の飼育化の要因を論じた。シルバナ・ローゼンフェルドは、チャビン・デ・ワントルのラ・バングダ区出土の動物骨・骨角器の分析から、過去の研究の問題点を指摘し、同地区が工房であった可能性を論じた。続く長岡は、パコパンパ遺跡から出土した人骨の形質学的な分析の方法をその結果の発表を行った。最後の発表であるジョン・リックとロサ・メンドーサは、2014年度の最新成果のレポートを行い、神殿の北の方に位置する建築Cの使用と埋め立ての過程を報告した。それぞれの発表後には、質疑応答の時間が設けられ、方法論から解釈、時期同定に至るまでの幅広いテーマで活発な討論が繰り広げられた。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

シンポジウム（本学会協力事業・後援事業）のご案内

● 国際シンポジウム

La producción de los espacios rituales en las regiones de la zona sur de los Andes

【日時】2015年2月11日(水・祝) 10:00~17:30

【場所】キャンパスイノベーションセンター東京
多目的室2

【定員】20名[先着順]

【参加費】無料(申込不要)

【使用言語】スペイン語(通訳なし)

【主催】山形大学人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」(研究代表者:坂井正人)

【共催】国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者:関雄二)

【協力】古代アメリカ学会

【プログラム】

10:00-10:15 Introducción

Masato Sakai (Yamagata University)

Yuji Seki (National Museum of Ethnology)

10:15-11:15 “Arquitectura, paisaje y la narrativa de la creación”

Alexei Vranich (University of California, Los Angeles)

11:15-12:15 “Festines, memoria social y espacio ritual en dos sitios Formativo de la Península Taraco, Bolivia”

Andrew Roddick (McMaster University)

12:15-13:30 Almuerzo

13:30-14:30 “Urbanismo incipiente en el Formativo de los Andes sur centrales: El caso de Khonkho Wankane, Bolivia”

John Janusek (Vanderbilt University)

14:30-15:30 “Paisaje, geoglifos y cerámica en las Pampas de Nasca, costa sur del Perú.”

Masato Sakai (Yamagata University)

15:30-15:45 Coffee Break

15:45-16:45 “¿Ritual doméstica? : Manejo del espacio ritual en el centro ceremonial de Campanayuq Rumi”

Yuichi Matsumoto (Yamagata University)

16:45-17:30 Debate final y clausura

【問い合わせ先】

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

TEL :

E-mail :

※★を@に置き換えて送信ください。

【情報リンク】

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20150211>

● 国際シンポジウム

Transformaciones y continuidades sociales en la formación del Estado Primario

【日時】2015年2月14日(土) 10:00~17:30

【場所】国立民族学博物館第6セミナー室

【定員】30名[先着順]

【参加費】無料(申込不要)

【使用言語】スペイン語(通訳なし)

【主催】国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者:関雄二)

【共催】山形大学人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」(研究代表者:坂井正人)

【協力】古代アメリカ学会

【プログラム】

10:00-10:15 Introducción

Yuji Seki (National Museum of Ethnology)

Masato Sakai (Yamagata University)

10:15-11:15 “Monumentalidad y la formación del estado archaico”

Alexei Vranich (University of California, Los Angeles)

11:15-12:15 “La producción artesanal en la sombra de Tiwanaku: Definiendo cadenas operatorias y relaciones sociales en la cuenca sur del Lago Titicaca”

Andrew Roddick (McMaster University)

12:15-13:30 Almuerzo

13:30-14:30 “Urbanismo telúrico y la producción política de Tiwanaku”

John Janusek (Vanderbilt University)

14:30-15:30 “Diversidad de la estructura sociopolítica en las sociedades formativas tardías: una perspectiva desde la cuenca suroeste del Lago Titicaca y su implicación a la expansión estatal.”

Yoshifumi Sato (National Museum of Ethnology)

15:30-15:45 Coffee Break

15:45-16:45 “Wari y Tiwanaku: Una perspectiva norteña”

Shinya Watanabe (Nanzan University)

16:45-17:30 Debate final y clausura

【問い合わせ先】

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

TEL: 06-6878-8252

E-mail:

※★を@に置き換えて送信ください。

【情報リンク】

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20150214>

● 公開シンポジウム

「天空の古代都市『マチュピチュ遺跡』を護れ

—日本・ペルー国際共同研究の成果—」

【主催】 国士舘大学、関西大学(国際文化財・文化研究センター)

【後援】 古代アメリカ学会ほか

【趣旨】

国士舘大学、関西大学等からなるマチュピチュ遺跡保存修復国際協力プロジェクトは、世界遺産マチュピチュ遺跡の劣化と保存に関する調査を続けている。現在までに得られた成果をもとにした公開シンポジウムを開催する。シンポジウムにはペルーからマチュピチュ遺跡保護管理事務所の専門家を招聘し、講演をお願いしている。人類の貴重な文化遺産の保護に貢献し、また日本とペルーの友好関係の増進に資することを目的とする。

東京会場

【日時】 2015年2月28日(土) 13:00~17:20

【場所】 国士舘大学・多目的ホール(中央図書館地階)
東京都世田谷区世田谷4-28-1

【定員】 500名(先着順:申込不要)

【参加費】 無料

【プログラム】

13:00-13:10 挨拶<国士舘大学学長>

13:10-14:30 特別講演「マチュピチュ遺跡の歴史とその保護・活用」(逐次通訳付)

ピエダッド・チャンピ、グラディス・ファルパリマチ
(ペルー文化省)

14:30-15:00 「太陽の神殿の保存修復に向けて:共同研究プロジェクトの成果」

プロジェクト代表 西浦忠輝(国士舘大学)

15:15-15:35 「デジタルアーカイブで残す:太陽の神殿の三次元計測」

芝田英明・小野勇(国士舘大学)

15:35-15:55 「地震で崩壊?遺構の構造耐力を探る」

伊藤敦志・西形達明(関西大学)

15:55-16:15 「知られざるウルバンバ溪谷遺跡群:保護、活用と地域発展」

藤田晴啓(新潟国際情報大学)

16:20-17:15 パネルディスカッション「より良い保存修復と活用:今後に向けて」

コーディネーター:天野幸弘(朝日新聞社)

パネリスト:グラディス・ファルパリマ・西浦忠輝・伊藤敦志・藤田晴啓

大阪会場

【日時】 2015年3月1日(日) 13:00~16:50

【場所】 関西大学・千里ホールA・B

大阪府吹田市山手町3-3-35

【定員】 500名(先着順:申込不要)

【参加費】 無料

【プログラム】

13:00-13:10 挨拶<関西大学学長>

13:10-14:20 特別講演「マチュピチュ遺跡の歴史とその保護・活用」(逐次通訳付)

ピエダッド・チャンピ、グラディス・ファルパリマチ
(ペルー文化省)

14:20-14:50 「太陽の神殿の保存修復に向けて:共同研究プロジェクトの成果」

プロジェクト代表 西浦忠輝(国士舘大学)

15:10-15:30 「地震で崩壊?遺構の構造耐力を探る」

伊藤敦志・西形達明（関西大学）

15:30-15:50 「聖地・マチュピチュ遺跡の気象環境」
森井順之（東京文化財研究所）

16:15-16:45 パネルディスカッション「より良い保存修復と活用：今後に向けて」

コーディネーター：天野幸弘（朝日新聞社）

パネリスト：グラディス・ファルパリマ・西浦忠輝・
伊藤敦志・西形達明・岡田保良（国士舘大学）

【問い合わせ先】

全般・東京会場：国士舘大学イラク古代文化研究所
（担当：小野間）

TEL：██████████

E-mail：██████████

※★を@に置き換えて送信ください。

大阪会場：関西大学国際文化財・文化研究センター

TEL：██████████

E-mail：██████████

※★を@に置き換えて送信ください。

【情報リンク】

公開シンポジウムならびにマチュピチュ遺跡保存修復プロジェクトに関する情報

<http://gbs.nuis.jp/machu-picchu/>

第 19 回研究大会報告

本学会第 19 回研究大会（主催：古代アメリカ学会、後援：名古屋大学）は 2014 年 12 月 6 日（土）、7 日（日）に名古屋大学で開催され、学会員 47 名、一般参加者 16 名、計 63 名の参加があった。調査速報が 12 本、研究発表が 4 本発表された。発表の詳細は以下のとおりである。



調査速報（12月6日13:00 - 16:40）

13:00 - 13:20

「ペルー北部地域の遺跡踏査：地域間ルート試論」
山本陸（山形大学）

本発表では、2014 年にペルー北部地域で実施した遺跡踏査にもとづく新たなデータを中心に、先行研究や周囲の生態環境などを考慮しつつ、ペルー北部における地域間ルートについて論じた。

これまで発表者らは、ペルー北部にあるワンカバ

ンバ川流域とチョターノ川流域において、詳細な遺跡分布調査をおこなってきた。その結果、両流域社会の通時的展開、とくに形成期（紀元前 3000 年—紀元前後）の社会変化に際して、神殿と称される祭祀建造物をめぐる諸活動と、それに深く関わる周辺地域との地域間交流が重要な役割をはたしたことを明らかにしてきた。

以上の成果をうけて、形成期の社会変化と地域間交流の関係性をより実証的に示していくために、ワンカバンバ川流域とチョターノ川流域の間にあるインカワシ市およびクテルボ市の周辺地域の遺跡踏査を計画し、新たなデータの獲得を目指した。

上記の調査範囲は広大で、セトルメント・パターン研究を目的とするような特定地域内の網羅的調査を短期間でおこなうことは困難であった。そのため、地域間交流、つまりは地域間ルートを切り口として、神殿遺跡や岩絵遺跡に特に着目しながら河川や尾根を中心に踏査をおこなった。また、これまでに先行研究がない地域においては、地元自治体や収集家への聞き取り調査などを通じて、データを補足した。

調査の結果、インカワシ市近郊では、パコパンバ遺跡およびエル・ローヨ遺跡と、ワンカバンバ川流域を含むより北方の地域、そして西方の海岸部とを結ぶルートを同定した。この根拠としたのは、ルート上に並ぶ神殿遺跡と岩絵遺跡の存在である。

また、クテルボ市近郊については、データは乏しいものの、岩絵遺跡やハエンおよびチョーロスの博物館収蔵資料から、パコパンバ遺跡およびカハマルカ地方と、ワンカバンバ川流域やハエン地方といっ

た北方や東方の地域へいたるルートを想定することが可能となった。

13 : 20 - 13 : 40

「ヘケテペケ川中流域第6次調査：モスキートZ神殿の発掘」

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

カルロス・モラレス（ペルー文化省）

発表者は2003年よりペルー共和国カハマルカ県のヘケテペケ川流域、とくに中流域北岸のアマス平原を中心として調査を重ね、形成期前期（紀元前1500-1250年）から中期（紀元前1250-800年）にかけての神殿建築の変遷を解明した。さらに2009年より南岸モスキート平原にて発掘を開始し、形成期早期（先土器期末期、紀元前2000-1500年）において、モスキート平原に大規模公共建築群が築造されていたとの見通しを得た。2011年にモスキート平原東端の大規模マウンド（Z1基壇）を発掘し、やはり土器が不在であること、また年代測定結果が紀元前2千年紀前半に対応することがわかった。2013年に平原内の遺構群の精査とトータルステーション測量を行い、Z1基壇を中核とするモスキートZ神殿を中心とする発掘調査計画を立て、2014年7～8月に発掘調査を実施した。この発表ではその成果の概要を示した。

カラル遺跡に代表されるペルー中央海岸～北中央海岸部の形成期早期の神殿建築の多くは、方形のピラミッドの中心軸上に、地上から基壇頂上までを結ぶ主階段を備える形態を特徴とするが、モスキートZ1基壇は異なる様相を示す。まず基壇は直線的な壁で構成されるものの全体の平面形は方形ではない。南北方向に長く、東西の長辺に小規模な基壇を伴う十字形である。また上記のような主階段は存在せず、各所に配置された狭く短い階段を登り継いで地上から基壇頂上部までアクセスすることとなる。頂上部には正方形の部屋状構造物がいくつか並んでいる。既知の事例と比較した場合、もっとも近いのはワスコ盆地のコトシュ遺跡コトシュ・ミト期建築である。

発掘現場は崩れやすいため十分に掘り下げることができなかったが、土留め壁の改変を伴う大規模な更新は少なくとも2回行われている。将来、より下層の建築まで掘り下げてその更新過程と年代を解明することとしたい。なお工芸品はまったく出土しなかったが、植物性のさまざまな有機物が良好な状態

で遺存しており、現在その分析を進めている。

13 : 40 - 14 : 00

「ペルー北部ワカ・パルティエダ遺跡の神殿更新について」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）

ビクトル・バスケス（ペルー・アルケビオ研究所）

ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティエダ遺跡にて、2002、2004、2013年と、発表者はこれまで3シーズンにわたって発掘調査を実施してきた。その成果の一つとして、セロ・ブランコ期すなわち形成期中期（1100-800BC）には多彩色壁画やレリーフで外壁の大半が覆われた神殿が存在したこと、その上にネペーニャ期すなわち形成期後期前半（800-450BC）の巨石を用いた神殿が築かれたことが明らかになっている。今回報告したのは、形成期中期の神殿を埋め始めて、その上に形成期後期の神殿を建てるまでの期間、すなわち「神殿更新」の最中に行われていた、儀礼的なものを含む諸活動についてである。ワカ・パルティエダ遺跡の周辺地域は乾燥しており、動植物遺存体の保存状態は良好である。そのため、例えば動物や人間の糞までも同定されることになった。そのような最新の分析結果から、形成期中期の壁面前にて、神殿更新の最中に行われた諸活動について考察した。

14 : 00 - 14 : 20

「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：資料形成過程の解明に果たすオノミー分析の可能性について」

鶴澤和宏（東亜大学）

ディアナ・アレマン（ペルー・サンマルコス大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ペルー北部高地、パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから検出された動物骨について報告する。本調査発表の目的は2つある。第1に出土動物骨の詳細を記載し儀礼行為の理解に供すること、第2に、近年、実践論的視点から資料の形成過程が注目されている研究動向を鑑み、動物骨資料がもつ新たな可能性を示すことである。

今回報告する資料は、パコパンパ神殿第3基壇の中心部に、等間隔で配置された複数の土坑から検出されたものである。哺乳類の四肢骨破片を中心に鳥

類などを包含する。動物骨と儀礼行為の関係については、それぞれの土坑における動物種、部位の組み合わせを検討する必要があるだろう。しかし、有機物である動物骨は分解・消失しやすく、個体の死から土中への埋没、発掘調査による回収まで、保存に関するバイアスを強く受けている。したがって動物考古学的分析においては、保存バイアスの程度を評価することからはじめるのが通常である。ところで、環境の影響を受けやすいという骨資料の特性は、骨が完全に分解消失してしまわない限り、個体の死から埋蔵・保存に至る様々なイベントまで、骨の上に記録されることをも意味する。地表面での放置、踏みつけ、風化などと関連する骨表面の微小な擦痕や崩落などもその一例である。従来、これら骨の改変に関わる情報は、資料形成の背景雑音と見なされ、アンデス考古学においては積極的に活用されることは少なかった。しかしながら実践論的な解釈において重視される、個々の遺物のライフヒストリーを復元するという視点からみると、個体の死後に生じた骨の改変は、遺跡に持ち込まれた動物（骨）がたどった過程を読み解く有益な情報となるだろう。本報告では、動物考古学が蓄積してきた基本情報に新たな役割を与え、遺跡における動物利用に関してより多くの知見を得るための方法論的枠組みについても展望する。

14:40 - 15:00

「先コロンブス期の中間領域における祭祀メタテに関する考察—ニカラグア共和国、コスタリカ共和国での調査から—」

植村まどか（京都外国語大学大学院博士前期課程）

メタテとは、メソアメリカ地域において古代より日常的にトウモロコシやカカオなどの食物の製粉作業に使用されていた石皿のことである。中間領域では、日常的に用いられていたメタテの他に、平坦部の表裏や脚部に線刻文様が施され、ジャガーやワシなどの動物を形象した「祭祀メタテ」と呼ばれているメタテが確認されている。これらのメタテは墓からの出土例が多いことから祭祀メタテと呼ばれているが、それらの祭祀メタテが先コロンブス期の社会においてどのように使用され、どのような役割を担っていたのかは未だ明らかにされていないのが現状である。

本発表では、発表者がコスタリカ共和国（以下コ

スタリカ）で実見した 89 点の祭祀メタテから、①祭祀メタテの型式分類と平坦部表面の摩耗痕の相関関係、②出土分布と出土状況、③祭祀メタテを模したと思われる土製品の分析を行う。そして、祭祀メタテがイスとして用いられたのではないかという仮説について考察する。分析から得られた所見は以下の通りである。

1. 型式分類と摩耗痕の相関関係から、I 型には摩耗痕の残り方に 3 種類の違いがあり、II 型には 2 種類の摩耗痕が確認できた。I 型、II 型の間では使用方法の違いが考えられる。さらに I 型全体の摩耗痕はイスとして、長辺の摩耗痕は製粉作業によるものだと考えられる。
2. I 型はニカラグア南部太平洋岸、コスタリカ北西部（ニコヤ半島）から中央盆地にかけて、II 型はコスタリカ南部およびカリブ海岸で確認されている。I 型の分布のうちニカラグアからコスタリカ北西部にかけての太平洋岸はメソアメリカ地域に属している。
3. コスタリカでは、I 型の祭祀メタテ上に人が座した状態を模したと思われる土製品が確認されており、I 型の祭祀メタテには「座る」という使用方法があったと考えられる。

上記のことから、ニカラグアおよびコスタリカにみられるいわゆる祭祀メタテの I 型は、イスとして使用され、メソアメリカ地域にみられる玉座との関係性を考察することができる。

15:00-15:20

「マヤ南東地域における広域編年確立のための年代学的研究」

市川彰（日本学術振興会特別研究員 PD・
国立民族学博物館外来研究員）

エルサルバドルでは 1970 年代後半に構築された土器編年や年代測定データが、現在もなお指標として用いられている。しかし、発表から約 35 年が経過した現在、土器資料の蓄積や年代測定技術の進歩により編年に齟齬もみられることから、再考が必要な段階にきている。また、年代測定データが蓄積されてきたものの、個別報告にとどまっており、時期や地域が異なる個別報告を統一し、比較検討した研究はこれまでにない。本発表では、マヤ南東地域の広域編年確立にむけた基礎研究として、鍵層となる複数の火山灰に関連する新たな年代測定データと

ともに、これまで発表者が実施してきたエルサルバドル出土土器の型式学的検討をくわえ、エルサルバドルの考古編年を再考した。

はじめに新たな資料と先行研究で報告されている資料計 133 点の年代測定データを暦年代較正プログラム Oxcal v4.2.4 を用いて、較正年代を算出した。さらに年代測定資料にともなう土器の型式学的検討をくわえ、新たに算出された較正年代の妥当性を検討した。検討の結果、先古典期前期から後古典期後期の約 2500 年間という時間幅をもつ基礎データを得ることができ、次の 4 点が主に明らかとなった。①100 cal BC~100 cal AD にはエルサルバドル全域で共通する土器型式が存在する、②従来イロパング火山の噴火後に位置づけられていた複数の土器型式は噴火以前にすでに出現している、③イロパング火山の噴火の被害が最も甚大であったエルサルバドル中央部では遅くとも 650 cal AD には再定住が始まっている、④ホヤ・デ・セレンを覆ったロマ・カルデラ火山の噴火年代は、コパドール多彩色土器の存在と再較正年代から 650~700 cal AD に位置づけられる可能性がある。

15:20-15:40

「アパートメント・コンパウンドの測量調査概報」

福原弘識（埼玉大学）

発表者はテオティワカン遺跡において、国家権力の表現媒体として機能していたと考えられる建築物の中でも、アパートメント・コンパウンド（一般住居址）の建築変遷過程に注目し、統治機構と一般住人との関係性を軸に初期国家の成立過程の解明を目指してきた。

テオティワカン国家は強力な統治機構の下に、広大な都市を計画的に建設したとされる。特に都市中心部を構成する大型建造物は、国家の宇宙観・世界観を投影するよう、その大きさや配置の綿密な計算がなされ、国家権力の表現媒体として建設されていたことが明らかになっている。都市内部に造営されたアパートメント・コンパウンドもこうした国家権力との関係性において例外ではなく、起源後 200 年前後から国家の統制下で建設が行われた。

本発表では 2009 年より行ってきたテオティワカン遺跡ラ・ベンティージャ地区における測量調査と遺構図のデジタル三次元図面化、および 2014 年に再開した調査の成果を報告した。ラ・ベンティージャ

地区は遺跡公園外縁の南西部に位置し、複数のアパートメント・コンパウンドが隣接して存在していることが発掘調査によって確認されている。特に 2014 年夏の調査においては、本地区の中心神殿・行政センターと考えられるアパートメント・コンパウンドの拡張と、隣接する住居址のデータを得ることができ、本地区が統治機構と一般住人を間接的に結ぶ中間的な行政単位としての役割を果たしたという先行研究の蓋然性を高める知見を得た。また、規格化されどの建築物も一様にみえるアパートメント・コンパウンドではあるが、内部の装飾や造形には独自色が見られるなど、強力な国家権力に対して従属的なだけではない住人の姿が明らかになっている。発表では測量調査から明らかになったアパートメント・コンパウンドの変遷過程を概観した上で、国家形成の過程で統治機構と一般住人の関係性がどのように変化してきたのかについても考察した。

15:40-16:00

「メキシコ西部、サユラ、サコアルコ盆地における踏査概報」

吉田晃章（東海大学）

本発表は、2014 年 7 月から 8 月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、サユラ盆地およびサコアルコ盆地における踏査概報であり、吉田が研究代表者を務める「メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間の交流」（基盤研究(B)：平成 26 年~28 年）の初回の踏査速報にあたる。本研究は先古典期の埋葬文化に焦点を当てたものであり、研究の計画と概要を報告するが、今回の踏査では製塩活動と関連する遺跡を複数踏査しており、これらの遺跡を中心に報告を行いたい。メキシコ西部地域は、1990 年代以降の調査によって、メキシコ盆地などを中心とした中央高原とは異なる文化が育まれてきたことが徐々に解明されてきた。例えば前 350 年頃から後 350/400 年にかけて現れる、ウェイガンが提唱した円形のピラミッドを擁するテウチトラン伝統である。この伝統の代表的な遺跡としては、テウチトラン村のグァチモンソン遺跡があげられる。テウチトラン伝統とは、円形のピラミッドを中心にその周りを取り囲むように同心円状に方形基壇が配置された、堅坑墓を伴う建築複合である。このテウチトラン伝統がメキシコ西部で終焉を迎えるころ、古典期から後古典期にかけてサユラ盆地では、製塩活動が活発に

行なわれるようになる。該当地域はタラスカ文化の西縁に位置し、メソアメリカにおける製塩活動を解明するのにも重要な地域となっている。そのため製塩活動が見られる遺跡も含め、1990年に始まったサユラ盆地考古学プロジェクト(Proyecto Arqueológico de la Cuenca de Sayula)が盆地内で調査を継続して行なっている。しかしながら、サユラ盆地内北部とその北に位置するサコアルコ盆地の踏査が手薄であることから、今年度は同地域において広く遺跡分布に関する踏査を実施した。その結果、製塩活動が行われた複数の遺跡が確認できたため、その概略について報告を行いたい。

16:00 - 16:20

「ニカラグア太平洋岸の考古学調査」

長谷川悦夫 (埼玉大学)

ニカラグア太平洋岸はコスタリカ北西部とともに、ニコヤ文化圏を構成する。この地域は、後 800 年頃のおト・マング語族のチョロテガ、後 1350 年頃のエト・アステカ語族のニカラオの移住によってメソアメリカ化したとされてきた。しかし、2000 年代に行われた太平洋岸の 3 つの遺跡の発掘調査によって、この仮説に重大な疑義が投げかけられている。

ニカラオの居住地と考えられ、従来の編年で後 1350-1550 とされる土器が出土する遺跡が調査されたが、放射性炭素年代では後 1200 年を下るものがなく、メソアメリカ文化を構成するいくつかの重要な要素(ピラミッド神殿、香炉、トウモロコシ等)が見つからなかった。

これはニコヤ文化圏の土器編年で、スペイン人直前の時代に空白ができたことを意味する。この空白を埋めるために、スペイン人直前の時代と想定され、なおかつ攪乱されていない良好な堆積を探し、土器と炭素サンプルを得る目的で調査を行った。

まず首都マナグア市周辺をはじめとした太平洋岸の各地で遺跡の踏査を行った。その上で、マナグア湖畔に所在するティピタパ市のチラマティーヨ遺跡を選定して試掘を行った。この調査で、大量の土器片と石器を得ることができた。出土する土器型式は、従来の編年で後 800-1550 年とされるものであり、調査の目的と合致している。ただし、遺物を包含する最上層から最下層まで、一見したところほとんど出土する土器型式の組成が変わらず、また生活面と想定される層も確認できなかつたことから、攪乱さ

れている可能性がある。いずれにせよ、回収した炭素を年代測定にかけるとの予定である。

また、チラマティーヨ遺跡からは玄武岩をはじめとした大量の石器が出土する。石器の製作が行われていたと考えられる。漁具の錘に用いられたと思われる両側面にくびれが入った土器片も多く出土しており、魚類の骨も出土していることから、湖での漁が重要であったことも想定される。来年度以降もこの調査は継続される。

16:20 - 16:40

「ホンジュラス共和国エル・プエンテ遺跡の発掘調査と 3D スキャニング」

寺崎秀一郎 (早稲田大学)

ホンジュラス共和国西部コパン県ラ・ヒグア市に所在するエル・プエンテ遺跡において 2011 年から再開した同遺跡建造物 6 の発掘調査の現在までの調査成果について述べる。

建造物 6 は同遺跡中心グループの西端に位置しているが、2003~2005 年の調査によって、上部構造は、疑似アーチによる天井部をもち、ベンチの保存状態も良好であることが確認されていた。その立地や規模から同遺跡支配者層の居住用建造物の一つと考えられており、今回の調査では、上部構造の修復とその最終居住段階の様相を明らかにすることを主眼とした。その結果、2 段の基壇と正面階段の存在を確認し、仮修復をおこなった。また、今回の調査を通じて、最終居住段階では南側に隣接する建造物 7 と接合していることも確認された。整形面を有する漆喰ブロックや石製樋などの出土状況等から、コパン遺跡周辺地域(たとえばラストロホン遺跡)と類似の屋根構造を有していたと考えられる。

一方、3D スキャニングについては、今後、考古学研究においても普及と発展が期待される分野であることは論を待たないであろう。そこで、2014 年には写真合成による 3D スキャニングの実証実験をおこなった。その結果、撮影技術のノウハウの蓄積や今後の活用方法の検討とさらなる検証実験の必要性はあるが、既存の技術の組合せでローカルな事情、すなわち、低予算での運用の可能性と現地側への技術移転に適合したシステムの構築も十分実現が可能であることも明らかになった。

なお、本報告は科学研究費基盤研究(C)「古代マヤ社会の発展・形成に関する基礎的研究(課題番号:

23520934、研究代表者：寺崎秀一郎）」(2011～13年度)、および、同基盤研究(B)「マヤ文明の王権発展過程の研究(課題番号:26300026、研究代表者:中村誠一)」(2014～17年度)の成果の一部である。

調査速報(12月7日9:00-9:40)

9:00-9:20

「ワリ帝国における土器の多様性について」

渡部森哉(南山大学)

中央アンデスでは後9～10世紀にワリ帝国が台頭した。この時代にはペルー北部高地から南高地までワリ文化の遺物の分布が認められる。しかしそれらの地域がワリ帝国の直接支配下にあったのか、あるいは在地の人々がワリ文化のものを主体的に取り入れたのかについては研究者の間で意見が分かれている。その理由の1つは、この時期に土器をはじめとする物質文化の多様性が認められ、その1つとしてワリ文化の土器が確認されるに過ぎないことにある。つまりワリ帝国の支配下にあったならば、ワリの遺物をもっとコンスタントに見つかるはずであると想定する研究者は、ワリ様式の遺物の希少性を根拠として、ワリの帝国支配を否定する。

本発表では、ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡を事例として、ワリ期に遺物の多様性が増加することを明らかにし、それがワリ帝国の支配下での人の動きに起因する可能性を示した。インカ帝国では80から100以上ともいわれる数の民族集団がその支配下にあり、それぞれが地方行政との単位ともなっていたが、ワリ帝国も同様に多民族国家であったと考えられる。インカ帝国の場合、その支配下で広まる物質文化に注目すれば統一性が目立つが、民族集団などに対応する物質文化には多様性が目立つことになる。統一性と多様性は帝国支配の異なる側面を示しているのであり、それらは排他的な関係にあるわけではない。

エル・パラシオ遺跡のデータは、ワリ期にカハマルカ文化の土器のタイプが増加したことを示している。カハマルカ文化のものではないワリ様式の遺物や他の遺物のバリエーションが多いが、カハマルカ地方以外では同一のものは見つかっていないため、搬入土器ではなく現地で作られたものと考えられる。それはこの時期の人々の移動から生じる相互交

流の結果であるが、その移動自体はあくまでワリ帝国の支配下においてであると考えられる。また土器の多様性は、こうした民族集団に対応するだけでなく、共通のコンセプトの各地における異なった表象として説明できるものもあることを指摘した。

9:20-9:40

「チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土石彫について」

伊藤伸幸(名古屋大学)

柴田潮音(エルサルバドル文化庁考古局)

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で、地下レーダー探査結果に基づく調査で「様式化されたジャガー頭部」様式の石彫2基が出土した。

メソアメリカでは、石彫を配置する法則が確認されている。オルメカ文化やマヤ文化では建造物の前や建造物に囲まれた広場内などに配置されるのが一般的である。先古典期中期における石彫文化はオルメカ文化に代表されるように、石彫が整然と計画され配置されていた。また、先古典期後期、メキシコのチアパス州からグアテマラそしてエル・サルバドルまでの太平洋岸から高地に至る地域で、イサパカミナルフユ様式の石彫文化が栄えていた。この石彫文化を代表するイサパやタカリク・アバフ遺跡では建造物に関連して石彫が整然と並んでいた。本調査では、こうした石彫文化のメソアメリカ南東端での様相をチャルチュアパ遺跡で明らかにすることを目的とした。

チャルチュアパ遺跡では、先古典期中期から後古典期までの30基を超す石彫が出土している。しかし、出土石彫の大半は科学的な発掘で出土したものではない。カサ・ブランカ地区調査では素面の石碑や丸彫りの石彫が建造物の近くから、エル・トラピチェ地区ではチャルチュアパ遺跡最大の建造物の中心軸上に並んで出土している。こうした状況を考慮し、石彫の存在とその配置を解明するために、2012年3月にチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区で建造物周辺の低い部分において地下レーダー探査を実施し、石彫の存在の可能性を探った。

エル・トラピチェ地区地下レーダー調査では、石彫と思われる異物等が確認された。2012年夏に行われた調査では、この調査結果に基づいて、石彫と思われる異物が連続して確認されるE3-1建造物の南

側部分で発掘調査を行った。この結果、石彫破片 1 基、動物形象頭部石彫 2 基が出土した。今回は、この石彫 3 基について発表する。

研究発表 (12月7日 9:40 - 12:00)

9:40 - 10:10

「アンデス形成期における黒曜石の流通と地域間交流：カンパナユック・ルミ遺跡出土黒曜石の蛍光 X 線分析から」

松本雄一 (山形大学)

ジェイソン・ネスビット (デュレーン大学)

マイケル・グラスコック (ミズーリ大学)

ユリ・カベロ・パロミーノ (ペルー・サンマルコス大学)

リチャード・バーガー (イエール大学)

本発表では、ペルー中央高地南部に位置するカンパナユック・ルミ遺跡の調査によって得られた黒曜石製品の蛍光 X 線分析の成果を提示し、それを元にアンデス形成期における地域間交流の問題を論じた。

リチャード・バーガーとマイケル・グラスコックの研究により、形成期後期にアヤクチョ県キスピサ産の黒曜石が中央アンデスの広い範囲に流通していたことが明らかとなっている。特に中央高地の大神殿であるチャビン・デ・ワンタルにおいては、形成期後期にキスピサ産の黒曜石が在地のチャートなどの石材にとって変わることが確認された。しかし、両者の位置は 600km 以上離れておりその流通のメカニズムは不明のままであった。

カンパナユック・ルミ遺跡は、形成期中期から後期にかけて栄えた神殿であり、2007、2008、2013 年に行われた発掘調査によって同時期の他遺跡に類を見ない大量の黒曜石が出土した。さらに同遺跡からキスピサまでは 100km 程であり、現在までに確認されている中では最も近距离に位置する神殿である。また、その規模も中央高地南部で最大級のものであり、同神殿が黒曜石の遠隔地交易において重要な役割を果たした可能性が指摘されていた。

以上の点から同遺跡出土の黒曜石の産地同定を行うことの重要性は明らかであり、発表者たちは、2014 年 8 月に行われたイエール大学とペルー国立サン・アントニオ・アバド・デル・クスコ大学の共同ワークショップにおいて、カンパナユック・ルミ遺跡出土の黒曜石製品 394 点の蛍光 X 線分析を行っ

た。

結果として、その 70%以上がキスピサ産の黒曜石であり、カンパナユック・ルミにおいては形成期中期からキスピサ産の黒曜石が集中的に利用されていたことが明らかとなった。また、キスピサ以外にもアンデス中央高地南部に広く分布する他の産地から黒曜石が持ち込まれており、少なくともその一部は土器様式と関連付けられることが示唆された。例を挙げると南海岸のコタワシ谷、中央高地南部に位置するアンダワイラス地方、ルカナス地方から運ばれてきた黒曜石が確認されている。これらの地域の土器様式と類似した土器がカンパナユック・ルミ神殿の建築から出土しており、神殿の建築と地域間交流の関係を考察する上で貴重なデータが得られたといえるだろう。またこれらの地域の黒曜石はごくわずかながらチャビン・デ・ワンタルにも到達しており、チャビン・デ・ワンタルとカンパナユック・ルミの間の非常に強い結びつきが黒曜石の流通という観点からも示される結果となった。

全体として、カンパナユック・ルミは、チャビン・デ・ワンタルと密接な関係を持ちつつも地域のセンターとして機能しており、ペルー中央高地南部、南海岸の各地から人々が訪れていたという発掘調査による仮説が裏付けられる結果となった。

10:30 - 11:00

「中期ホライズン開始期の様相：情報の流れに注目して」

土井正樹 (日本学術振興会特別研究員 PD・山形大学)

アンデス考古学の編年において、紀元後 550/750 年～1000 年頃の時期を、中期ホライズンと呼ぶ。中期ホライズンに中心的な役割を果たしたのが、ペルー中央高地南部のアヤクチョ谷で成立したワリ国家であり、一般に、中期ホライズンはワリ国家の芸術様式が中央アンデス一帯にひろまった時期として理解されている。現在多くの研究者が利用する中期ホライズンの編年を作り上げたのは Dorothy Menzel である。しかし、Menzel による編年が発表されてから半世紀以上が経過し、しだいにこの編年の問題点が指摘されるようになった。

Menzel 編年の中で、本発表では中期ホライズンの開始期に焦点を当てた。中期ホライズンの開始時期に関しては、Menzel はペルー南海岸のイカ・ナ

スカ地域に山岳部の土器様式の影響が及んだ時点、すなわちナスカ 9 様式の出現時期として定義している。しかしながら、現在ナスカ文化の研究者の多くは、ナスカ 8 様式、あるいはロロ様式の出現をもって、中期ホライズンの開始としてとらえている。その一方で、ナスカ 9 の出現期を中期ホライズンの始まりと考える研究者も依然として存在する。

本発表では、編年上の争点となっている時期、すなわち従来の編年で前期中間期後期から中期ホライズン 1 に相当する時期を中期ホライズンの開始期としてくり、この時期の土器に関する情報の流れに注目した。情報の流れという観点に立てば、中期ホライズンの開始時期は、イカ・ナスカ地域においてアヤクーチョ谷からの一方的な影響が認められるようになる時期として定義することができる。

発表者がアヤクーチョ谷のワンカ・ハサ遺跡において 2002 年に行った発掘調査により、中期ホライズン開始期のアヤクーチョ谷とイカ・ナスカ地域との交流を示す資料が得られた。様式的な検討により、土器編年上、それらの資料が中期ホライズンの開始期に位置づけられることを確認した。続いて、それらの資料をイカ・ナスカ地域の資料と比較することにより、ワンカ・ハサ遺跡の資料とナスカ 8 様式の同時代性と、イカ・ナスカ地域からアヤクーチョ谷への土器情報の流れを明らかにすることができた。結論として、分析対象としたワンカ・ハサ遺跡の資料が使用されていた時期には、アヤクーチョ谷からイカ・ナスカ地域への一方的な土器情報の流れは確認できないこと、そのため、それらの資料と同時代であると考えられるナスカ 8 様式を中期ホライズンのみに位置づけることには問題があることを指摘した。

11 : 00 - 11 : 30

「新たな古代アメリカの比較文明論の構築に向けて」

青山和夫（茨城大学）
坂井正人（山形大学）
米延仁志（鳴門教育大学）
鈴木紀（国立民族学博物館）

本研究発表は、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」プロジェクト（平成 26～30 年度、領域代表：青山和夫）の目的、研究活動と意義について論じる。その目的は、①精密な自

然科学的年代測定や古環境復元によって、メソアメリカとアンデスの高精度の編年を確立し環境史を解明する、②高精度の編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行う、③植民地時代から現代まで、メソアメリカとアンデスの文明が中南米の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。

本研究プロジェクトは、精密な編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明という、一次文明の詳細な社会変動に関する基礎的な通時的データを収集して比較研究し、環境変動、王権、農耕・牧畜、人口変動、戦争、経済、イデオロギー等の諸側面から実証的かつ多面的に検証する。両文明のデータから、いつ、なぜ、どのように都市や社会が変動し、広域を支配する政治体制が発達したのかを比較する。

実証的な比較文明論の研究の基盤となるのが、高精度の編年と環境史復元である。科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」プロジェクト（平成 21～25 年度、領域代表：青山和夫）において世界標準の年代目盛を作成する上で明らかとなったのは、湖沼の年縞堆積物は蓄積性の誤差をもつという難点であり、また北半球で作成した年代目盛もアンデス地域のような南半球の低緯度では未だにデータの蓄積が少なく 10 数年のズレを伴うことである。本研究では、統計的な誤差がない年輪年代法でこのズレを修正する。

本プロジェクトは、古代文明の詳細な社会変動を解明するだけでなく、古代文明に関する情報が、植民地時代から現在までの中南米の先住民文化に及ぼす影響も考察する。先住民と非先住民の双方が、自分たちの過去や文明をどのように評価しながら、先住民文化を描いてきたかを探る。こうして後世の人間が資源として活用する古代アメリカ文明という視点を提示し、文明の終焉という概念に再考を促す。

本研究は、従来の世界史研究で軽視されてきたメソアメリカ文明とアンデス文明という、古代アメリカの二大文明について、考古学、歴史学、文化人類学等の異なる分野の人文科学と自然科学の多様な研究者が連携して新たな視点や手法による共同研究を推進する。つまり古代アメリカ各地の地域・時代毎の特性や詳細な社会変動を通時的に比較研究して、古代アメリカの比較文明論の新たな展開を目指す。アメリカ大陸のメソアメリカ文明とアンデス文明を正しく理解することにより、旧大陸のいわゆる「四大文明」に基づき形成されてきた一般的な文明観を

大幅に修正できる。本研究は、世界の諸文明の共通性と多様性を再認識し、バランスの取れた「真の世界史」の構築に大きく貢献する。

11:30 - 12:00

「太陽と月のピラミッドに象徴される古代テオティワカンの世界観」

杉山三郎（愛知県立大学）

本発表は本年度（2014）のアメリカ考古学協会総会のシンポジウム「メソアメリカ形成期における古代都市の発祥」において杉山が発表した「テオティワカンにおける早期都市形成の特性」をさらに発展させた日本語バージョンである。

テオティワカンにおける都市発祥の原動力については自然環境条件、火山噴火、栽培植物・動物種の発展と普及、また土器や黒曜石を中心とした優れた工芸品製作、市場の役割など様々な要素が挙げられてきたが、人々が必要以上に密集した大都市化を促す十分な説明に至っていない。本発表では、古代都市テオティワカンに特徴的な象徴的都市計画とモニュメント性に注目し、そこに表現された宗教的世界観とメソアメリカ特有のカレンダー・システム、そしてその宗教力・政治的意義について述べた。まず、建築に関する3D考古学データから都市中心部を形成する3大ピラミッドと「死者の大通り」の空間分

析を方向性・建造物の長さの単位の研究から解析し、古代人の宇宙観（時間と空間の広がり）の認知構造について論じた。本発表では特に「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」に焦点を絞り、発表者が担当した両ピラミッドでの発掘調査成果を取り組みながら、浮かび上がった古代人の宗教的世界観を解釈した。「月のピラミッド」では7層にわたる増築跡が確認され、また「太陽のピラミッド」でも複雑な改築史が特に前庭部で明らかになっている。それぞれの絶対年代資料によると、現在見られる大規模な都市計画は紀元後200～250年頃に確立され、その空間配置の解析からは365日の太陽暦と260日の宗教暦が組み込まれていることが示唆される。また「月のピラミッド」では5基の生贖埋葬墓が発見され、内部から多様な象徴品と生贖体、さらに総計100体以上におよぶ動物体も出土しており、古代人の宗教的世界観の一部を読み取ることが可能である。さらに現在までに両ピラミッド周辺で発見されている石彫の資料も考慮すると、「太陽のピラミッド」「月のピラミッド」はそれぞれ260日の乾季と105日の雨季を象徴し、太陽—熱—戦争—男性、月—水—豊饒—女性の2元論的なシンボリズムに関わっていたと考えられる。そしてその伝統はアステカ大神殿、さらに現代先住民族の世界観にも読み取ることが可能である。

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2015年も学会主催の「研究懇談会」（東日本部会、西日本部会）を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第20回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第20回研究大会・総会を2015年12月5日（土）、6日（日）に東京大学（東京都文京区）において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきま

すようお願いいたします。

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第18号（2015年12月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。執筆細目が改定されましたので、投稿希望者は、必ず会誌第17号に掲載されている、最新の寄稿規定・執筆細目をよくお読みの上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。「論文」・「調査速報」・「書評」の

いずれも随時募集しています。「論文」は査読（通常、原稿受領後1～2か月で査読終了予定）を終えたものから随時掲載が決まります。「調査研究速報」は9月25日までに届いたものを第18号の査読対象とします。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先：

大平秀一（運営委員、会誌編集担当）

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学文学部アメリカ文明学科

Tel. Fax.

E-mail

②会報「38号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字（会報2ページ分）以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容につい

ての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス

（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 5月15日（金）

○発行予定 6月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号：1211948(普)

口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

（事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方

がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いしま

す。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

<編集後記>

新会長の任命により、第10期も継続して会報の編集に携わることになりました。今後もよろしくお願い致します。

今号は、新会長あいさつ、特集：研究者の道、書籍紹介、東西懇談会報告記事、シンポジウム報告、シンポジウム案内、研究大会報告と盛りだくさんの内容になりました。古代アメリカ学会の発展を象徴するようで、嬉しく思います。

今後も会報では、会員の方々の幅広い活動内容や経験談、研究のこぼれ話などを積極的に掲載していきたいと考えております。ご協力のほどよろしくお願い致します。

(中川)

第10期も中川氏とともに引き続き、会報の編集に携わらせていただくことになりました。よろしくお願い致します。

おかげさまでどうにか今号も発行することができました。ご寄稿いただいた方々、報告記事執筆者の皆様、また今号の編集をほぼ一人で行って下さった中川氏に感謝をささげたいと思います。

(福原)

発行	古代アメリカ学会
発行日	2015年1月30日
編集	古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識 中川 渚
古代アメリカ学会事務局	
〒990-8560	
山形県山形市小白川町1-4-12	
山形大学人文学部	
E-mail	jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座	00180-1-358812
ホームページ URL	http://jssaa.rwx.jp/